

教育的現實 (承前)

——教育哲學基礎論——

森

昭

(三) 種的共同體——共同的心性

生命の自然的・歴史的生成發展進歩の運動の根底に要請として想定されるであらう全體的生命（この想定に多少とも纏綿する全體的生命の實體化的見方は、我々自己自身の個的主體的發達向上更には實存的主體性の絶對否定的實現として撥無せられ、全體的生命は單なる實體ではなく、却つて實體即主體的なる絶對無即絶對生命に絶對否定的に轉化されるであらう。）がその自然生命の次元に於ける生長生成に際して、環境自然即ち物體との被規定即規定的なる疎外即媒介的聯關に於いて、自然生命の共同體を形成して種的生命に特殊化される時、生命が絶對に對して持つであらう即自的疎外性（即自と對自との論理的關係からも推定される様に、即自的疎外性それ自身が顯在的なのではなくて、それは却つて對自化された疎外性の直接的基底として實在即想定されるのであるが）は對自化され、生命は自己自身を種的に限界閉鎖するが故に、生命の生成發展は阻害抑壓されて自然生命の低次元に停滞踟躕せざるを得ない。自然生命の共同體として固定化される種的生命の基礎は、絶對に對する生命の即自的呼應性の現成として生まれ

る所の個體をも、その低次なる自己保存の目的に對する手段となし、本能の種的前個體的なる法式に由つて個體をその種の閉鎖的限界性の中に封鎖せんとする。即ち個體は本能的存在者たる限り單なる種的個體であり、種的生命的基礎の單なる有機的構造肢體であつて、絶對媒介の即自的直接的基礎たる對自存在性を持つ事がなく、却つて生命の疎外性を強化固定せしめる手段的存在者たるに止まり、かくて自らも亦絶對の疎外者たる外ないであらう。然し假令自然生命的個體たる人間が種的であるにしても、猶絶對の絶對的疎外者たる單なる物體そのものではなくして、實は飽く迄絶對媒介の主體性を即自的に具有するものなのである。生命は一方絶對の疎外態としてこれに對する相反性を持ちながら、同時に個體を生む根源として絶對に對する呼應性を持つものであつた。この本質的自己矛盾性の故に、假令生命が種的生命的基礎に於いて疎外に陥らうとも、猶それはこれの阻害的閉鎖性の限界を突破して、より高次の生成發展の運動を否定的に恢復し、これに即して新たな運動を遂行せんとする。こゝに存在次元の轉換飛躍が行はれるのであり、これの主體が正に外ならぬ個體なのである。即ち絶對と何等の聯關なき自體存在的生命と言ふ如きものが、自己自身の中から即ち單に内在的に生成發展の運動を起すのではない。若し然らば生命の次元飛躍的なる連續即非連續的生成發展はあり得ないのであり、これが現實に行はれて居る事實を具體的に自覺理解するためには、生命を絶對との根源的なる聯關に於いて捉へる外ないであらう。個體は一般に、種的生命的前個體性と共にその反面に主體的個體性とをその構造契機となし、従つて一方に絶對との呼應性を持ち絶對の個的現成たるが故に、かの生命の次元の飛躍轉換を遂行し能ふのである。同時に然しこの事は個體が、その前個體性に於いて種的生命の疎外性に連なり個體性に於いてその疎外性を否定止揚して絶對實現の基礎に轉ずる主體的媒介性を持つ、といふ原本的自己矛盾を持つ

といふ事を意味するであらう。個體はこの本質的自己矛盾の故にそれ自身に止住する事を得ず、直接即的自己自身の否定に陥り、自己否定の中からの自己恢復に即して新たな發達向上の運動を必然的に起さざるを得ないのである。然しこの運動が起されるためには、この自己矛盾が對自化される現實的機縁があり、個體生命の崩壞する危機の具體的現前がなければならぬ。自然生命的個體が環境との種的生命的構造聯關の單なる有機的構造肢體として、從つて本能の種的前個體的指導決定に由つて、即自的に生きる限り、その個體性が對自化される事なく却つて前個體的基底の中に直接に吸收埋没されて居るが故に、前個體性と個體性との矛盾對立は可能態に止まつて顯在化されないであらう。所が一度環境自然と個體との種的生命的構造聯關に特定の重大なる變化が生じて、(而もその變化は環境と個體との疎外即媒介的・對立即同化的なる矛盾聯關性より必然に起らざるを得ぬと考へられる)種的生命的自己同一性が破綻し、その疎外的自己目的が維持され得ざる境位が發生するに到つて、全體的生命は、個體の個體性の對自化更には絶對媒介的主體への飛躍的轉換を俟つて、種的生命的基體の疎外性を絶對否定して、自己の高次なる生成發展の媒介基底に轉化せんとする。個體と環境との滲透融即の聯關が失はれ、個體が、種的生命的構造聯關と否定的に對立し、この構造聯關に於いてのみ環境への順應同化的機能を全うし得る本能の規定指導から脱却し、以て種的生命的基體の疎外的自己保存に直接に奉仕する位置より轉じて、却つて絶對媒介的主體たる可能性を持つ所の對自存在者に轉換飛躍するに到る時、初めて前個體的基底に埋没された個體性が對自化され、以て個體が兩者の矛盾對立を持つと同時に、他方前個體的基底が直接に融即滲透して居た環境自然とも否定的に對立する事となり、自己内及び對外的なる相關的二重對立に身を置かざるを得ないのである。かゝる二重の矛盾對立の境位が正に、全體的生命が個體の

行動を俟つて高次の生成發展の運動を次元飛躍的に始行せんとする機縁となる。逆に言へば、かゝる二重の矛盾對立の狀況にあつて危機に直面せる自己の生命を猶保存維持せんとする個體の無意識的乃至意識的努力の底には、生成發展を無限に持續せんとする全體的生命の衝動的・意志的逼迫があるであらう。(自然的生命乃至はこの上位に直接するであらう未だ猶低次の生命の生成發展の運動を、右の如く疎外即媒介的或は否定即肯定的運動として把握せんとする事は、已に理性化され精神化された高次の主體的生命の構造を以て逆に低次の基體的生命を理解せんとする、本末顛倒ではないかといふ批判は當然豫期されるが、右の考察態度は必ずしも主體的生命と基體的生命との構造上の直接的同一視を意味するのではなく、實は兩者の次元的階程の相異は飽く迄で見失ふ事なく、而も兩者の構造的比論關係を、具體的媒介的なる主體的生命の立場より、理解せんとする基礎存在論的に方向付けられた論考態度である。且つ又今は絶對との即自的聯關に於いてあるとは言へ、右の如き疎外即媒介的運動として生命の生成發展を捉へるに非ざれば、生命内在の立場を脱却し得ず生命に對する超越の道を見失ひ、生物學的・心理主義的更には單なる生命哲學的抽象に陥る外ないであらう。)

個體は右に述べた如き環境との矛盾對立的狀況の中に生き通す事が出来ない。新たなる高次の聯關が個體と環境との間に形成創造されねばならぬ。環境即ち物體への依存性は生命の疎外性の根據であるとしても、猶これは生命の免れ得ざる本質的制約であり、この依存性からの端的脱却は同時に生命の全面的壞滅を意味する。所が今は環境への直接的依存性が破綻せる危機的状況に生命は置かれて居り、従つてそれとの媒介的聯關の新たなる形成が要求されて居るのである。然し環境への直接的依存性が破綻した以上、最早本能はこの媒介的聯關の形成に於いて個體の行動を決

定し指導する力を缺いて居る。こゝに於いて今や對自的となつた個體性が、全體的生命に衝動されつゝ、具體的內質を以て機能し作用せねばならぬであらう。即ちそれは先づ自己と對立せる環境の新しき狀況を洞察せねばならぬ。而して洞察した結果に基いて、遂行さる可き生命維持の行動の仕方を選定せねばならぬ。この二つの操作は最早共に自然生命の本能の次元を超え、これ以上の次元の對自化顯現を豫想せしめる。蓋し本能が外的環境に對する直接無媒介的なる反應作用的順應であつたに對し、この場合には自己の内への反照作用が一度行はれ、而もこの向內的反照が向外的行動の媒介とされて居るからである。個體が自己と環境との距離を洞察して言はゞこれを自己内に反照するといふ事は、已に外と直接に滲透貫入し合ふ事のない内が個體の中に現成し、同時に個體が疎外的なる種的生命的基體の即自的構造肢體たる直接的疎外性から脱して、自己自身に固有なる自分自身の内を持つに至つた事を示す。この内が即ち意識に外ならない。意識とは従つて、個體が自己と環境との距離を洞察し環境の構造を覺知して自己の行動を豫料する主體的可能性であり、即自的本能的なる直接行動を、豫料企劃に導かれる即且對自的行動に絶對否定的に轉換具體化する對自的知的なる否定的媒介者である。従つて意識は本質的に行動的境位に於いて、これの直接性の對自的分裂性を綜合す可き主體的作用の否定的媒介契機として成立するものであつて、端的に理知的なものとして自體存在するのではない。意識の對自化と共に、自然的生命はその即自的直接性から否定的に脱却して、却つて個體に於いて自己内反照を持つ所の對自的媒介的生命に飛躍的に轉化發展したのである。と同時に個體は自然的生命の直接的自己限定體として自然生命的存在者たると共に、更に對自的なる意識的存在者に發達轉化したのである。

次に個體に於ける意識の成立と共に、自然生命の次元に於いては環境と直接に滲透貫入し合ひ種的生命の單なる座

であつた即目的なる身體は、今や環境との否定的對立と相即する個體性の對自化に基いて、個體的なる身體として對自化されるであらう。而して自己と環境との距離を洞察した意識的個體は、この距離を言はゞ埋めるために特定の身體的行動を遂行し、自然生命的よりはより高次の聯關を環境との間に形成創造する。環境との距離的對立を媒介として意識の豫料指導に由つて意識的行動をなし得るに到つた時、初めて個體は對目的なる身體的存在者となつたのである。而も彼の意識的個體性は對目的身體と言ふ具體的地盤を獲得したと言ふ可く、對目的身體との具體的聯關に於いてはなければ、意識的個體性はその具體的機能を發揮する事が出来ないのである。こゝに我々は再び生命の自己矛盾を見る事が出来るのではないか。身體は成程意識と相互滲透の關係にあり相互に境界を付け難い融即的聯關を形成するものとして、單なる物體そのものではないにしても猶それは物體たる側面を本質的に具有し、この故に物體依存性から原理的に脱却するものでないのであるが、種的生命的基礎の直接的疎外性を絶對否定す可き使命を帯びて絶對の即目的現成として成立する意識的個體性は、却つてかゝる物體依存的身體に依存せざるを得ぬものとして、再び絶對からの疎外性に不斷に纏綿される外なきものとなる。意識的 \parallel 身體的存在者の媒介の主體性の裏は直ちに疎外的物體性であり、物體的疎外性との聯關に於いてのみその主體的媒介作用が行ぜられるのである。然しこの次元に於いては疎外的身體は已に意識的主體性に媒介されたる物體なるが故に、又意識的個體性も直接的即目的生命でなくて一定の媒介を通過せるより高次の主體性なるを以て、對目的身體との疎外即媒介的聯關に於ける意識的個體性を道じての生命の生成發展の運動も、最早環境への單なる本能的順應同化の直接的行動でなくして、個體の意識的意欲に基く所の環境に對する積極的働きかけ更には環境の變化改造の具體的行動である。身體に由る環境の變化改造の行動が即ち勞

働に外ならない。個體は今や意識的の身體的存在者たると共にこれと相即して勞働的存在者となつたのであり、生命はその生成發展の運動を身的個體の勞働に於いて持続する段階に到達したのである。

上に我々は、外に對する自己の内・物體的環境に對する主體的意識を持ち、且つ種的生命の基體に直接に埋没吸收される事なく、却つてこれの直接的疎外性を否定的に自己に媒介する主體性を即目的に具有する個體の成立を追跡した。これは同時に絶對の絶對媒介作用の具體化への一步前進を意味する事は明瞭である。意識はこの段階におけるこの媒介作用の主體に外ならない。然し生命の生成發展の運動の原初的なこの段階従つて又人間發達の端緒的階程に於いては、疎外的物體からの個體の對自的獨立性が稀薄であり、媒介的主體性の活動が微弱なるが故に、自己と環境との距離が純粹客觀的に認識される事は困難であり、却つて高々漠然たる距離感として感受されるに止まり、従つて環境も自己に對立する客觀的實在としてではなく、單に漠然たる外として感覺されるにすぎないであらう。かくて自己も亦環境との否定的對立に於いて自覺される事がなく、従つて一般に自己意識が明確に確立される事もあり得ないであらう。故に一般に自己と環境とは、直接なる種的生命的次元に於ける如く直接なる滲透貫入の聯關に於いてあるものではないにしても、少くも相互に滲透貫入するかの如く感ぜられるであらう。かゝる特定の感じが感ぜられるのは、已に自己と環境との間に一定の距離が成立したからであり、然もその感じが滲透貫入のそれであるのは、その距離的對立が明確なる自己意識に由つて客觀的に對自化される事のないのに由る。要するにそこには内ならぬ外・外ならぬ内、或は自己ならぬ環境・環境ならぬ自己といふ如き、内と外・自己と環境との矛盾律的な區別の自覺はない。同様に又内なる意識・外なる環境には、矛盾律に支配された普遍的客觀的な秩序ある體制の成立はなく、唯漠然たる混

沌があるにすぎないであらう。従つてこの段階に於ける個體の意識乃至知性は、矛盾律以前の前論理的なる意識乃至知性であり、その思惟は分有の論理に支配された神話的思惟である。即ち一般に生命と非生命・生と死・心と體・心と物との間には矛盾的對立が存せず、人間と自然・人間と神との間には汎神論的な同一性が支配すると感ぜられるであらう。

内と外・自己と環境との對立が對自化されぬ事と相關して、自己自身の内部に於ける前個體の基底と意識的個體性との對立も亦單に即自的たるに止まり、媒介的個體性が自覺的に主張される事はあり得ないであらう。されば個體性に基く自己の個體的意欲乃至行動も、亦對自的自覺を伴つた純粹に個的なるそれではなく、却つて種的生命的基底と直接に聯關する所の勝れて前個體的なる意欲乃至行動である。従つて個體はその意欲乃至行動の仕方において他の諸個體と否定的に對立する個性を發揮する事なく、却つて諸個體の生命的基底の種的共通性更には共同性に基いて、相互に極めて強度の共通性更には共同性を持つ所の前個體的仕方に於いて行はれるであらう。かくて成程最早單に種的な本能の法式そのものではなく、已に意識的個體性を媒介にせるより高次のものであるにしても、猶而も前個體性の強い意欲乃至行動の共同の様式が多く個體の間に自ら成立するのであり、個體の意欲乃至行動も實はこの共同様式の一齣たるに止まるであらう。蓋し個體は未だこの共同の様式から逸脱する純粹に個的なる意欲行動をなす程に強力なる自覺的個人性を持たず、逆に共同の様式は前個體的生命の種的共同性に基底付けられたる共同性・團體性の故に、個體に對し強制的拘束的のぞみ、個體の逸脱を禁止する壓力を個體に及ぼすからである。この意欲乃至行動の共同の様式が所謂集團意識に外ならない。集團意識は斯の如くその強制拘束の威力を、個體の物體依存的なる前個體

的生命基底の種性より汲むものなるが故に、種の疎外的なる側面を持ち、媒介的個體性の自由なる個性的伸長發達を阻害抑壓するものなるは否定出来ない。個體を種的生命共同體の限界内に封鎖せんとする本能の種的法式は、今や身心的次元に於いては集團意識の拘束性に轉化變態して、身心的存在者たる個體の共同體への同化組入の強制法式となつたと考へる事が出来るであらう。斯の如く集團意識は個體を共同體に同化組入せんとするものでありながら、同時に集團意識の成立は却つて個體と個體との關係性を本質契機とする社會性の對自化と相伴ふものである事を、我々は注目せねばならぬ。種の生命は個體を生む事に於いて、絶對との即自的呼應性を實現するものであつた。而して生まれる個體は原理上多數であり、その生命的基底性に於いて相互に種の生命の共同性を持つ。所が自然的生命の次元に於いて形成される生命的共同體に於いては、猶意識的個體性の成立がなく個體は物體環境と直接に滲透貫入し合ふが故に、個體と個體との社會的關係は即自的潜在的たるに止まり、物體から獨立せる對自的個體と個體との關係が對自化される事はあり得ないと言はねばならぬ。これに反して集團意識の成立は個體と個體との關係の對自化と相即し、而もこの關係の共同的社會性を支へる形相原理と言ふ可きものである。然し已述の如く個體の自覺的個性的對自性が稀薄なるが故に、個體の共同的集團意識に直接に拘束制約される面が一方的に優勢なるは當然であり、又こゝに成立つ諸個體相互の社會的關係が即且對自的なる具體性を實現し得ざるは止むを得ぬとしても、猶却つてこゝに諸個體相互の社會的關係の前個人的基底が興へられる事は、見遁し得ないであらう。絶對は單に個人の主觀的自覺に於ける往相的遡源向上の方向のみに求められるものではなくして、實は個人と個人との眞に人格的實存的なる關係に於いて還相的に現成する、といふ事をその本質的一面とするのであらうが、かゝる人格的實存的關係は端的にそれ自身

に於いて即ち無基底的に實現されるものでなく、却つて直接なる共同的基底に基底付けられつゝこれが主體化的絶對否定に於いて實現されるものである。この共同的基底を基體的に支えるものが種々の生命であり、形相的に規則するものが集團意識に外ならない。正にこの故に種々の生命は絶對と即自的に呼應相關すると言ふ可く、又集團意識は絶對の即自的現成たる意義を荷ふのである。

身心的次元に於いては未だ個體の個體的意欲乃至行動が對自的に遂行されざる事と相關して、こゝに於ける個體の勞働も亦即自的であり對自的自覺を以て遂行されないのであらう。成程勞働は、個體の意欲と環境との間に一定の距離の對立が成立して意欲の充足が阻害されて、生命の發展が中断される狀況に於いて、生命の生成發展の高次元の恢復の活動として成立するものであるが、個體的自覺が確立されて居ないために、個體を通じてその生成發展を次元飛躍的に持續せんとする生命は、明確に個體に由つて自覺される事なく、却つて漠然たる生命衝動に近きものとして感ぜられるに止まるであらう。而して又個體内の意識體制が明確ならざるために、個體は自己と環境との距離的對立従つて又環境の具體的構成を客觀的に充全に捉へる事が出来ない。かくてこゝに行はれる勞働も、自己の意欲充足の直接的缺如感の直接的除去といふ仕方で行はれるにすぎず、環境を自覺的に對境化してその客觀的構成の具體的認識に基いて意圖的企劃的に行はれる事は、極めて少いと言はねばならぬ。即ち一般に神話的思惟に従つて、又自己と環境自然との直接的融即感に基いて、自己の主觀的希望を無邪氣に環境自然に投影しながら、屢々呪術的仕方に従つて、勞働は遂行されるのであらう。要するにこの段階に於いては、個體の勞働を通じて高次の生成發展を持續せんとする生命の運動は、未だ猶その直接性を具體的媒介に轉化せる自覺的運動と十分には云ひ難いものである。従つてこの次元に於いて

は、自然生命的次元に於ける如く生命的基礎に個體が直接に埋没する事なく、却つてこれと否定的に對立する面をもつのであるが、猶その否定對立性の即自性の故に勞働も企劃技術を媒介にせる對自的勞働ならぬ即自的勞働であり、従つてかゝる勞働を通じての共同的基礎への個體の分立も決定的たり得ざるが故に、假令右に述べた如く集團意識の成立を伴ふ個體相互の關係の對自化は或る程度行はれるにしても、勞働組織の技術的分化が發展せず、又個體が基礎更に一般的には財を私的に占有する事が猶少いが故に、勞働——更にこれを社會的視野に擴げて經濟——に於いては、生産と消費とは直接に連続して、個體と個體の對自的關係性を地盤とする交換を具體的に媒介する事は十分に行はれぬと言ふ可きであらう。即ち生産の主體と消費の主體との對自的分化なく、従つて又この分化を媒介する交換の媒介者なきが故に、一般に共同體に於ける勞働——經濟の主體は密接に融即する、寧ろこの主體は共同體そのものである、と言ふも過言ではないであらう。

以上に於いて多少その原理的構造を説明せる共同體を、我々は自然生命的次元に成立するであらうとして類型的に特性付けた生命共同體と區別して、特に生活共同體と呼び度いと思ふ。これはこの共同體に於いて已に幾らか對自化される個體性の契機と、この個體性と結び付く行動・勞働の直接的即自性とを、個體的行動性をその即自態に於いて言表するにふさはしい生活といふ概念を以て、表現せんとするものに外ならない。然し生命共同體と生活共同體とが存在的に明確に區別されるものでない事は勿論である。蓋し何等の生活的共同性を有せざる種族的なる生命共同體の存在する筈はなく、又種の生命の共同的基礎を缺いて生活共同體が存立し得ざる事は、明白にして疑を容れない。兩者は事實に於いては常に不可分的に融即聯關して、以て一つの具體的なる共同的社會存在を形成するのである。然し

又この一つの具體的共同社會存在に於いても、未だ何等の個體的主体化を受けざる却つて前個體的基礎的なる生命存在の階層と、即自的にはあれ己に何等かの程度個體的に主体化された身心性の階層とが、區別される事は上論よりして明瞭であり、従つて又概念上の差別・名稱上の區別を事態そのものが要求すると言ひ得るでもあらう。然し生命共同體及び生活共同體は飽く迄概念上名稱上の區別に止まり、事實上は一體存在をなすが故に、この一體性を表現するために我々はこれを種的共同體と呼ぼうと思ふ。さて我々は上來の論述よりして知られる如く生活共同體は、一方全體的生命の生成發展の運動の必然的なる自己形成體としてそのより高次なる運動に對する不可缺の基底をなすものでありながら、同時に又個體の個體性を抑壓阻害する疎外性を反面に有し、而して又他方個體と個體との人倫的關係を成立せしめる基底として絶對の即自的現成たる意義を荷ひながら、同時に又その高度の特殊的閉鎖性の故に却つて諸他共同體と否定的に對立すると言ふ絶對現成に對する疎外性を有するが故に、生活共同體は二重の矛盾對立性を藏するものなる事を我々は自覺せざるを得ない。而して前の矛盾對立の前後兩項たる、生命の運動に對する支擔性と個體の發達に對する阻害性とは、實は生活共同體が、絶對に對して呼應即疎外的なる生命共同體に基底付けられつゝこれが即自的なる個體的主体化として成立するといふ事實に、根源するものなる事は明瞭である。次に後の矛盾對立の前後兩項たる、共同的人倫關係に對する基底の支擔性と諸他共同體に對する否定的對立性とは、夫々生命共同體が多數の個體を生むといふ事に潛勢的に直接化された絶對的人倫的現成性が生活共同體に於いて主体化的に顯在化される事と、絶對的人倫的現成が物體依存的生命共同體を基礎的媒介とするといふ事とに、相關するのではないか。要するに、生活共同體の持つ二重の矛盾の對立は、生命共同體更には一般に生命そのもの持つ絶對に對する呼應即疎外

性に基く根源的矛盾構造に究極的には根源するものであり、而も生命共同體の生活的主體化に由つてこれの一重の矛盾對立が二重化されたと考へる事が出来るであらう。これを他面より見れば、單なる自然生命的次元に於ける絶對——生命の呼應即疎外的聯關の即自的直接性は、生命の生成發展が身心次元に於いて生活的に主體化されるに到つて、二重化されてその媒介性を一歩進め、従つて對絶——生命の絶對媒介を更に具體化したと言ふ事が出来るのではないか。とまれこの二重化された自己矛盾性の故に、種的共同體はそれ自體に止住するを得ず、却つて何等かの形に於ける自己分裂的事態に陥らざるを得ぬのであり、この事態の根源即超越より全體的生命の生成發展の運動及びこれと相即する絶對的人倫的現成の具體化の運動が、新たに次元飛躍的に生起即遂行されるのである。

然し種的共同體の自己分裂は必ずしも急激に起る事がないのであらう。共同體の成員諸個體を即自的直接的云ふ可くれば表現的勞働に止まらしめ得ざる程度に、共同體の經濟的要求が發展進歩せざる間は、勞働經驗の發達に伴ふ個體の意識の發達が強大ならざるが故に、論理的知性の發達も亦微弱であり前論理的な神話的思惟が個體の意識を支配し、従つて共同的なる集團意識が個體の意欲乃至行動に對する必然的規制力を失はず、こゝに種的共同體はその直接的自己同一を保持し得るであらう。而して已に述べた如く集團意識は個體性従つて又個體と個體との社會關係を對自化するものでありながら、同時に他面この社會關係の全體的共同性を支えるものとして、却つて個體の個體性をこの全體的共同性の中に強制抑壓し同化吸收する本性を持つものであつた。この事は明かに集團意識が否定媒介的構造をもち、自己矛盾を孕んだ自己同一者たる事を示すものではないか。集團意識の成立と共に對自化された個體性とこれに基く個體相互の社會關係が、全體的共同性に對して對自的分立せんとする限り、共同的集團意識はそれを自己の疎

外態となし、その疎外を否定して自己に同化吸収す可く抑壓強制するのである。然し個體の個的なる對自的分立性が微弱なる間は、集團意識の右の如き否定媒介的構造は明確化されず、却つて直接的自己同一を保つかの如き外見を呈するであらう。即ちかゝる種の共同體に於いては、勞働技術の言ふに足る可き發達もなく、又複雑多岐なる生活様式の分化もなきが故に、個體(特に未發達の個體即ち子供)はその中に即自的に生活する事を通じて、自ら共同體の充全なる成員として成長發達するであらう。即ち遊戯や狩獵に於いて自ら子供達は共同體の地形地勢に習熟するであらうし、又觀察や作業に於いて自ら共同體の勞働技術を修得するであらうし、又聞く事話す事を通じて自ら共同體の神話を覚え、一般に他の諸個體との共同の生活を生きつゝ漸次共同體の生活様式をのみ込むであらう事は、容易に推測される所である。即ち子供達が共同體の完全なる成員たるためには、共同體に於いて直接的即自的に生活する事を以て足りるのであり、こゝには完全なる成員たらしめるための特殊なる教育的配慮は恐らく必要ないであらう。然し斯の如き共同體への個體の直接無媒介的なる同化吸収の現象の中にも、實は右に解明せる如き集團意識の否定媒介性は即自的にはたらいて居るのであつて、唯それが顯在化されず潜勢態に止まつて居るにすぎないのである。集團意識の否定的媒介性を特にその潜勢的即自性に於いてのみ見れば、かゝる共同體には教育は行はれて居ないと言ふ外ないであらうが、その外見の底に潜む原理的なる否定媒介的構造を洞察する限り、己にかゝる共同體にも教育機能が事實的に生起して居ると言はねばならぬのではないか。換言すれば集團意識の否定的媒介性を個的に代表しこれを顯在化する個的教育者の對自的成立なきが故に、未だ教育活動は遂行されないものであるが、共同體が云はゞ即自的主體として教育機能を事實的に生起せしめて居るのである。而して集團意識の否定的媒介性の稀薄は、同時に又個體自身の自己矛盾

性が對自化されざる事と相即するが故に、個體は集團意識の中に教育機能的に同化吸收される事を通じて、その全體の生存に於いて完全に發達し育成されるのである。即ち共同體に於いて個體は自己分裂をふくまぬ端的なる全人として、自ら生活的に教育されて行くのである。要するに共同體の教育機能は直接全體的であり即自具體的である。全人としての個體を生活的に完全に教育する。

所が勞働が直接的即自的たるに止まり得るのは、生命の生成發展從つて又人間の發達向上の原初的段階に於いてのみである。物體的環境自然は、生命の媒介的主體性に對する疎外性を飽く迄留保するのであり、最後迄人間の媒介活動に對する否定的對立性を失ふ事がない。生命が身心的存在次元に於いて勞働の人間の活動を通じてその生成發展の運動を持續する段階に到つても、物體的環境自然は單なる直接的・主觀的希望によつて簡單に變化改造されぬ面を顯し、無邪氣にこれに立ち向ふ個體に對して嚴しい抵抗を示し、その疎外的實在性を冷酷に主張するであらう。環境自然の實在的抵抗の體驗を幾度か繰返す時、最早本能の確實正確なる指導決定に身を委ね得なくなつた個體は、漸次意識的に自己と環境との客觀的距離を對自化し、自己内照の度を深めてその意識性自覺性を擴充し、以て環境の客觀的構造をより完全に把握する事を次第に學習する様になるであらう。かくて勞働は漸次意圖性企劃性を強め、合理的技術性の契機を徐々に増すであらう。かゝる勞働經驗の進歩と共に、個體を環境との間の直接なる融即滲透の感は稀薄となり、かゝる感じに於いて支配的であつた前論理的知性・神話的思性は次第にその妥當の範圍を狭められ、より論理的合理的なる知性・思惟にその位置を讓るに到るであらう。斯の如く勞働經驗の進歩と共に論理的知性・思惟の優勝が益々決定的となるに伴つて、個體の個體性の發達伸長がより強大となり、全體的共同性に對する個體の對自的

分立の度が高まつて來るであらう。これは同時に集團意識に對する個體の疎外的分立の對自化に外ならない。

個體の疎外的分立性の對自化は又集團意識の否定的媒介性の顯勢化を意味する。然し個體が絶對媒介の自律的主體として獨立する事が少く、猶集團意識の種的強制が強大なる間は、集團意識は個體の否定的對立による自己分裂を通じて猶もその自己同一を保持し続けんとするであらう。即ち個體性の伸長に伴ふ合理的知性に集團意識は容易に屈伏せず、却つて發達せる個體の合理的知性を自己に奪つて對者たる個體の知性を壓伏し、而も自らを神話的絶對者の權威と結び付けて絶對化し、更には客觀的制度として自らを客體化し、以て權威的威壓的に個體に對し臨む様になるであらう。かゝる程度にまで集團意識の否定的媒介性が對自化される事と相即して、斯の如く制度化せる集團意識を代表する特定の身分が成立し、この身分に屬する特殊の個體が、集團意識に背反對立するであらう他の成員個體に對して、これに同化吸収す可く威壓的權威的にはたらきかけるであらう。こゝに共同體の或る程度意識的自覺的なる教育活動が遂行される様になるわけであるが、猶この場合にも充全なる意味で自律的なる精神的個人的個人との間の教育關係が成立するのではなくて、却つて個體と個體とは飽く迄共同體的に限定された種的閉鎖的の制度に於いて教育的に關係交渉し合ふに止まる。この制度で特に著しきものが即ち成年式であると思はれる。成年式は、子供の個體性が漸次強まり集團意識からの逸脱の可能性が増大すると同時に又より充全に集團意識の支持者たり得るに到る青年期に於いて、共同體がその集團意識の中に彼を有機的に同化組入しその規律統制に服せしめ、以て共同體の充全なる成員たらしめる事を目的として作つた制度であらう。青年達は嚴しい規律と激しい修鍊とを長期に互つて堪へ忍ぶ事によつて、又特に神祕的體驗の頂點に於いて、聞き初めた知性の明晰を忘却し伸び來つた個體性を抑壓し自己中心的

な傾向性を放擲して、共同的集團意識の中に吸収されて行き、共同體の自己同一の有機的なる肢體たるに甘んずる様になるのである。かくて青年達は共同體の充全なる成員となり小供から大人に轉化育成されたのであり、こゝに正に共同體の最も著しい教育作用は遂行されたと言はねばならぬ。而して成年式が勝れて共同體成員の主體性の訓練育成である事は明白である。然し共同體に於いても教育作用は單に主體性に對するものゝみには止まり得ないのであつて、假令特定の制度を伴ふ事はなにしても客體性への教育作用も同時に行はれるであらう。その最も著しきものが勞働技術への教育であると思ふ。既に若干の發達を遂げたであらう特定の勞働技術は、個體が自らの力で直接的生活を通じて自然に習得し盡し得ざるものとなり、その完全なる習得には先輩達の人爲的意圖的なる指導が必要となるであらう。この意圖的な指導と意識的な學習とを俟つて初めて、發達せる勞働技術は後代に傳達されるのである。而してかゝる勞働技術への教育も、個體をして自己中心の經濟生活を営ましめる事を目的とするのではなくして、實は種的共同體を形成する全體的なる種的生活の存続を本來の目的とするものなるが故に、勞働教育も成年式と同様に共同體の自己同一の確保の目的に奉仕すると言はねばならぬ。

右に述べた所より知られる如く、集團意識の否定的媒介性の對自化と相即して成立する、或る程度の意圖性自覺性を持つ所の教育作用は、共同體の無意圖的事實的生起としての教育機能と同様に、共同體の自己同一を保存維持する事をその目的とするものである。而して無意圖的なる教育機能と意圖的なる教育作用との間には劃然たる區別限界はなく、却つて兩者を契機とする複雑なる混淆形態が實存し、個體性の漸次的伸長と共に後者の契機が次第に強化されるのではなからうか。ともあれ共同體の教育一般は、集團意識従つて又共同體が、否定的媒介を通じてその自己同一

を保持せんがために、本質必然的に内具する所の根本的機能・作用である。これを成員個體の側より見れば、個體が共同體の自己同一の共同的支持者と言ふ可き集團意識に由り徹底的に滲透規定され、これに對する背反對立の態度を捨て、共同體との融即一體の感を深化充實する事に外ならない。共同體が即自己であり自己が即共同體であると言ふ事を、全人的自己を以て直接に體驗する時、共同體の内的統一性は極めて確固たるものとなるであらう。前個體の生命基底の規定力が猶強力に作用し個體性の發達が微弱であつて、共同的な意欲乃至行動に個體が支配される度の猶強大なるこの段階に於いては、右の如き融即一體感は特に強度に充實されるであらう事は自明である。かくて又絶對の即目的なる現成態と言ふ可き共同體的人倫は、眞に主體的に充實され確立されるのである。成員と共同體との全人的融即一體の體験的充實といふ事を本質的内質とする共同體の教育は、この點に關する限り極めて注目す可き特質を持つと言はねばならぬ。

然し共同體の教育の特質は必ずしもその全面的な好ましさを意味するものではない。却つて共同體が個體性の伸張を抑壓し、又諸他共同體と否定的に對立するといふその本質的疎外性と、生命の歴史的發展進歩の基體であり、同時に人倫關係の基底であるといふ絶對への呼應性とが、實は又共同體の教育にもそのまま反映しており、従つてそれは内面的な自己矛盾を蔽ふ可くもなく内具して居る事を、我々は見遁すわけに行かないのである。この自己矛盾は共同體の教育をそれ自體に直接に止まらしめず、却つてより高き教育形態の契機として止揚される可き絶對否定的發展の運動を起さしめるものである。著るしき例に付いて具體的に述べよう。先づ主體性の教育即ち成年式を見るに、それは個體の共同性からの逸脫共同體からの分立の可能性乃至傾向性を前提し、而もこれを抑壓否定して個體を共同性に悅服

せしめ共同體に組入せんとするものである。所がこれを媒介する手段としての規律修練の嚴しさ激しさは、却つて強力なる個體性のみよくこれを堪へ忍び得るものなるが故に、成年式の目的は實は個體的主體性の伸長強化なしには完遂され得ぬといふ内的自己矛盾を持つのである。事實修練規律に對する耐忍に於いて優れたる個體的主體性を發揮した青年は、共同體に於いてより優越せる地位が約束されるのである。假令これが唯一の原因ではないにしても、猶共同體に於ける地位的優劣の差別はやがて個體の共同體からの分立を傾向付けるものとなる事明白である。次に客觀性への教育たる勞働技術への教育を見るに、これも初め共同體の維持保存を經濟的に遂行するために、成員を勞働技術に堪能ならしめんとするものである。所が勞働技術を習得するためには、個體はその意識性を高め論理的合理的知性を明晰にし、従つて個體性を伸張強化する事が必要である。加之勞働に於いてより大いなる堪能性を發揮し得る個體が、自己の私的欲求を強化するであらう事は當然であり、共同體の目的に奉仕する勞働の本來的目的に背反せんとする傾向を多少とも強める事は必然である。こゝに客體性への教育の自己矛盾がある。要するに共同體の教育はその注目す可き特質にも拘らず、否この特質の故に却つてそれ自體に止まり得ざる内的必然性を藏すると言はねばならぬ。

以上幾らか詳細にその構造形態の原理的本質を解明把握せんと試みた種的共同體は、歴史の原初的段階に於いて存在したと推定される所の社會形態であつて、我々の歴史的社會的現實の中に斯の如く純粹な構造形態に於いて存在するものでない事更めて言ふを俟たぬ。然し種的共同體は高度に發展進歩せる現實に先行する社會形態として理念的に想定されるのみならず、同時に高度の歴史的社會的現實の基體的構造契機たるものである。身心的次元以下に於ける前個體的生命は、假令その自己矛盾性に由り身心的個體を成立せしめても、猶それ自身の前個體の種的な構造の自

己同一性を保持し続けるのである。勞働し實踐する個體—個人が歴史的發展即建設の主體なりとすれば、前個體的生命がそれ自體に於いては非歴史の乃至前歴史のなる事は當然であり、個體—個人がそれより分立して歴史が發展即建設されるに到つても、猶前個體的生命基礎の構造そのものは變化する事なく歴史の非歴史の基礎として存続するものである。かゝる前個體的生命の、身心次元にまで到達せる自己形成態たる意味を持つ種の共同體も、特に前個體的生命基礎との直接的聯關の面に於いては、歴史の發展進歩に拘らずその自己同一性を保持する非歴史の基礎として、歴史の各段階に於いて存在するものと言はねばならぬ。されば人間の個人性の發達が微弱なる歴史段階に於いては言ふ迄もなく、假令個人性が高度に發達して結合社會化の傾向が如何程増大しようとも、種の共同體の契機を全然缺如する社會が現實に存立する事は絶對にあり得ないのである。種の共同體の契機は現實の本質的構造契機をなすのである。後に詳述する如く社會的現實の結合社會化の傾向が極點に達し社會の對立分裂が激化する危機に際し、國家は特に種の共同體の契機の根源的融一性を對自化し、その媒介基礎としての本性を強調する事に由つて、國家の即且對自的なる統一を建設組織せんとする。要するに種の共同體の契機の歴史の社會的乃至國家的現實に於ける保存媒介は、生命の生成發展の側から見れば事實的存在的であり、絶對の倫理的現成の側から見れば理想的當爲的である。即ち種の共同體は事實的に存在するものであると同時に、當爲的に建設される可き理想であり、その理想としての構造形態は存在的に與へられるものでありながら、同時に建設される可き國家の當爲的構造形態との聯關に於いて決定されるのである。我々が右に論述した種の共同體もこの意味に於ける存在即當爲であり事實即理想なのである。

種の共同體は個體と個體との倫理的なる社會關係を成立せしめるものなるが故に、倫理的疎外態たる結合社會の分

裂對立の否定的止揚に於いて發展即建設される國家の、即且對自的なる人倫的組織の即自的基底をなすものである。

この即自的人倫を支える形相が即ち種的集團意識であつた。集團意識はその構造上寧ろ共同的社會的であるが、單に集團的客觀的ではなくして同時に個體的主體的なるものである。特に集團意識を個體的主體性に内面化して見る時、それは正に共同的心性と言はる可きものではないか。種的共同體從つて又集團意識が存在即當爲的たる事を聯關して、共同的心性も亦事實即理想的である事は當然である。共同的心性が我々現實の人間に於いても強力に支配する事は、原始社會の心性に關して勝れた研究を行つた二三の學者が明確に指摘して居る通り事實であるが、同時に即且對自的人倫の建設に要求せられる或る共同的心性を特に、涵養陶冶す可き事は我々に理想として課せられたる當爲なのである。成程共同的心性の中には合理的知性の進歩と共に廢棄さる可き迷信的不合理的なるものがあり、人間の個體性の眞正なる發達育成を阻害して居る事は否定出來ぬ事實である。然し共同體との從つてといふよりは寧ろ諸成員個體との一體融即の心性は、高次の精神的人格的人倫の建設に對して不可缺なる主體的心術なのではないか。諸他個人との一體融即の心性を我々は一般に愛といふ言葉を以て表現する事が出来るであらう。共同的心性に外ならぬ愛がそれ自體に於いては、未だ猶即自的直接的であり文化愛（エロス）でもなく又宗教愛（アガペ）でもない事は勿論であり、從つて文化的發展と宗教的絶對とを不可缺の建設契機とする即且對自的人倫の建設に對する、充分なる主體的心術たり得ざる事は言ふ迄もない。寧ろこの即自的直接的なる共同體的愛は、個體の結合社會的個人化と共に、或は個體の文化的主體化と共に、その即自的直接性を否定せられる運命にある事も、否定す可からざる事實であるが、猶個體が結合社會的個人化・文化的主體化の極に於いて、諸他個人との共同的一體融即の人倫的交渉聯關より離れる事

が、實は個人の人倫的疎外たる事を自覺せしめ、以て再び人倫の即且對自的建設に獻身するに到らしめる所の、絶對否定的轉換を基底的に媒介するのは、實は矢張りこの共同の心性であり共同體的愛なのではないか。共同體的愛を即自的にではあれ幾らかでも内具し得ざる人が、結合社會的個人化・文化的主體化の極限に於いて絶對否定的に轉換されて、人倫的社會の建設に還歸するといふ如き事は、事實上あり得ない事なのではないか。諸他個人との共同體的愛に誠實且つ眞摯に生きんとする人間が、一方に於いて免れ難き自己の結合社會的個人化と文化的主體化の故に、止む事を得ずにこの共同體的愛から離れ寧ろ諸他個人と否定的對立の關係に入りつゝ、而もかゝる状態を自己の傲慢であり又罪であるとする痛切なる自覺より、絶對自己否定的に轉換して即且對自的人倫の建設に獻身するに到るのではないか。初めから諸他個人と愛による一體融即の心性を持つ事なく、従つて愛（従つて又憎）に對し中和的無記のなる非主體的人間が、右の如き個人的主體化の状態を自己の傲慢罪と痛感する熾烈なる主體性を持ち得るはづがなく、又人倫の建設に積極的に參加する事もあり得ない事は當然ではないか。勿論即自・對自・即且對自といふ概念の論理的構造聯關からも推測される様に、即自的なる共同體的愛と・對自的なる文化愛と・即且對自的なる宗教愛とは、相互媒介的聯關にあつて必ずしも明確な區別を容れるものでなく、共同體的愛にも已に文化愛特に宗教愛の契機がはたらいて居る事は否定出來ず、又共同體的愛を超越即根源的に主體化すれば宗教愛に轉するのであるが、今は一應三者の間に段階的區別を設ける事は概念を明確にするためには許される事と思ふ。

個人と個人との間の教育關係も實は右の如き共同の心性―共同體的愛に主體的には基底付けられて本來成立するものではないか。教育關係の成立す可き客觀的社會的根據を追跡すれば、嚮に共同體の教育機能及び教育作用の成立に

關して述べた如く、共同體の集團意識の否定的媒介性が對自化される事態に求めざるを得ないのであるが、教育關係成立の主體的根源を反省する時、私は少くもその即目的形態を共同的心性——共同體的愛に求めざる外ないと考へざるを得ないのである。共同的心性を特に教育關係との聯關に於いて見れば、一般に教育衝動乃至教育意欲と言ふ可きものが考へられるであらう。かゝる教育的衝動乃至意欲は假令已に自覺的意圖性の契機を藏しては居るが、猶それ自體に於いては直接的即目的であり、必然にこの直接性即自性は破綻せざるを得ず、従つてそれは最初の形體在方に止住する事が出来ず、誠實且つ眞摯に遂行せんとすれば却つて高次の教育關係に轉化止揚される外ないものであるが、猶かゝる即目的直接的なる教育的衝動乃至意欲を有せざるものが、高次の文化的更には質存的教育活動を遂行する主體的意志を持ち得ざるであらう事も否定出来ぬ事實ではなからうか。教育衝動乃至教育意欲は高次なる教育活動遂行の主體的基底であり、之等に何等かの程度仕方に於いて必然的に纏綿する、性愛的衝動性・自己擴大的傾向性等々の直接的生命なる諸限定を純化乃至昇華する事によつて、之等の持つ種的なる即目的直接性は絶對否定されて、より個的主體的なる教育關係に轉化向上するのではないか。初めから文化の傳達教授といふ事のみを唯一の目的として教育活動を遂行する人間は現實には存在せず、又端的に宗教的法の傳燈のためのみに遂行されるかの如く見える教育關係の主體的基底にさへも、何等かの形態に於ける直接的教育意欲を跡付ける事が出来るのではないか。かくの如く教育的衝動乃至意欲は全ての教育活動の主體的基底たるものであるけれども、猶それ自體に於いては客觀精神の傳達教授或は絶對媒介的攝取傳燈等の教育活動的關係ではないが故に、我々はそれを本來的なる教育關係を言ふ事が出来ず、寧ろ却つて前教育的關係と言ふ外ないであらう。前教育的とは決して教育と無縁的と言ふ事ではなくして、却つて本來的

教育の基底でありながら而も本來的教育そのものではないと言ふ事を表はすものに外ならない。

さてその心身的精神的成長發達に於いて原初的段階にある子供は、比較的純粹に種的共同體的なる世界に生きて居るのではないか。勿論子供の世界と雖も已に高度に發展進歩せる現實の中にあるものとして、最早全く種的共同體的であると言ひ得ぬにしても、猶子供の世界が少くも構造上種的共同體に近似する事は、發達心理學的考察よりして肯定される事實ではないか。高度に發展進歩せる現實は大人の現實であり、子供に對しかゝる現實はその構造の全面に互つて充全に對自化されて居ると言ふ事が出来ない。却つて現實は共同體的形態に於いて子供にあらはれて居ると考へねばならない。子供は共同體的に現實の中に生きて居ると言ふ事も出来るであらう。子供は大人と異なる固有の世界に住んで居る。我々は子供の健全なる發達・育成を希望する限り、子供の世界の固有性を具體的に認めねばならぬ。所が種的共同體は自己矛盾的であり高次の形態に止揚さる可き内的必然性を持つものであつた。同様に子供の世界も自己完結的でなくして、却つて子供の身心的・精神的成長發達と共に大人の世界へと發展的に解消する内的必然性を持つ。子供の世界も從つて亦發展的であり解消的なのである。されば子供の世界の固有性を認めるといふ事は、その發展の解消性を無視してその完結的絶對性を強調する事ではない。これは悪しき意味の兒童中心主義である。子供の世界の固有性とはその發展的消滅性を込めた限りの固有性でなければならぬ。とすれば子供の世界そのものにあつてはその固有性を認める事は出来ないのであつて、却つて子供の世界が發展的に解消し行く大人の世界即ち具體的現實の立場からのみよくその固有性は正當に確立されるのである。特にこの固有性が子供の教育の原理として把握されねばならぬ時、この事は極めて重要な意味を持つ。即ちそれ自體に於いては前個人的無自覺的なる子供の世界の即自的

固有性は、現實の大人の自覺を媒介にして言はゞ再編成再組織される時、初めて教育の原理たるに堪へ得ると言はねばならぬ。要するに子供の教育には、子供の世界の固有性と大人の現實的世界の構造との兩者を完全に見渡し得る具體的な心情と知性とが要求されるのである。こゝに子供の教育一般に初等教育の困難があり、又有能なる教育者が腕を揮ひ得る興味深き幾多の問題が横はるであらう。

要するに初等教育が眞に具體的に遂行されるためには、子供の世界の固有性と大人の現實の構造との間隔對立が教育哲學的に綜合される事が必要である。而してこの綜合の原理が即ち共同體の原理に外ならない。即ち共同體は子供がその中に全人的に生きる全體的世界であると同時に、大人の現實の基礎的なる構造契機をなす事に由つて、兩者の現實・世界を內的に綜合する原理と言ふ事が出来る。共同體的なるものをかゝる原理として把握する事が、現代の教育哲學特に初等教育理論に要求されて居るのではないか。初等教育を現實から遊離せしめる事なく、却つて現實の具體的建設にとつて必須なる本質的役割を果すものとして確立するためには、國家的現實に於ける右の如き共同體的契機の教育哲學的な構造説明が要求されるのである。不完全なる覺悟して簡單に述べよう。先づ種的共同體はその原初的段階に於いては、その成員の數は僅少であり地域の擴りは狭小であり、従つて集團意識の統制拘束の力は強固であつて、一般にその閉鎖性は極めて高度のものであり、この段階に於いては種族的共同性が生活的共同性の直接なる基底をなしたと考へられる。所が成員數の増加及び交易鬭争等を媒介とする他種族との通婚等に由つて、種的共同體の地域的擴りは漸次廣大となり、集團意識の統制拘束は次第に弛緩し、その閉鎖性の度は低まり、却つて多くの共同體を並存せしめるに到るでせらう。之等の共同體は、種的共同體そのものの如く相互に閉鎖的でなくして、却つて相互に共通なる特定の共同意識と云ふ可きものによつて媒介聯絡されて居るであらう。而もこの共同意識は種的共同體そ

のものの集團意識の如く純粹に種的ではなくして、却つて或る程度類化された所の文化的意識とも言ふ可きものではないか。斯くの如く種的共同體そのものの様に種族的共同性をその共同體の樞軸的基底とするのではなく、種族的なる直接的無媒介的共同性は漸次云はゞ後退し、次第に強められる共同精神の共同性が前者との媒介に於いて而もその上に現成するに到る共同體を、我々は民族と言ふのである。而してこの共同精神が民族精神乃至民族文化と稱せられるものに外ならない。要するにその下層に於いて種族的共同性を保有し、而もこれとの媒介に於いて民族精神を共有する所の共同體の總體が、國家的現實の中心的な基體的契機をなすと言ひ得るでもあらう。然も全ての共同體が一舉に聚合して現實の基體を形成するのではなくして、共同體の聚合は漸次狭きより廣きに及び様々の形態を形成しつゝ遂に現實の全面を張り渡す全體的基體となるであらう。この擴大展開の段階は種々の觀點より様々に區別する事が出来るであらうが、今我々とは特に教育哲學的觀點よりこの段階付けを行はうと思ふ。然る時、先づ血の共通性を基礎としつゝ扶養組織として成立する家族共同體が單位的な共同體として考へられる。次に或る程度多數の家族が、特定の狭小なる地域と一定の傳承・慣習とを共同的地盤としつゝ聚合せる、郷土共同體が考へられる。最後に共同の文化形態を有し或る程度の種族的共同性を持つ共同體の全體的聚合としての、民族共同體が擧げられる。教育的觀點より見られたる之等共同體を特に陶冶共同體と呼び得るであらう。その行動範域が極めて限局されて居る子供に對する初等教育に於いては、彼等の主たる行動範域たる家族及び郷土が陶冶共同體として無視す可からざる役割を果す事は更めて言ふ迄もない。家族と郷土との教育的機能性を無視して初等教育が具體的に遂行され得ざる事は、現代諸學說の強調する通りである。然し初等教育が單なる子供の教育たるに止まらず外ならぬ國民初等教育である限り、單なる家庭教育乃至郷土教育に止まり得ず、却つて更に民族の教育的機能性を媒介せねばならず、現に又媒介しつゝあるのである。子供は家族乃至郷土共同體へと陶冶されるのみならず、同時に更に民族共同體へと陶冶されねばならぬ。然し

初等教育に於いては民族がその全體的具體性を以て教育的に機能する事は事實上不可能である。蓋し子供は未だ民族共同體の充全なる構造肢體たり得可き程に十分の身心的・精神的成長發達を遂げて居ないが故である。こゝに於いて陶冶共同體としての民族が、子供の身心的・精神的成長發達の程度段階に應じて教育的に組織編成されねばならぬ所以がある。教科編成の現實的基礎もこゝに置かれねばならない。要するに初等教育は一般に、教育的に再編成されたる民族共同體、即ち對自的なる個人性を媒介せざるといふ意味での即自的直接態に於ける民族共同體へと子供を育成陶冶する事を、その陶冶理想とすると言ふ事が出来る。然しこゝに注意す可きは、現實に於いては國家に媒介されざる單なる民族と言ふ如きは、存在せざるが故に、民族共同體への育成陶冶に於いても何等かの意味の國家性が顧慮される事は必然である。然し初等教育に於いては子供の個人性が十全に伸長發達せざるが故に、國家性も眞に對自化される事少く却つて即自的で言ふ可くんば共同體的に機能するに過ぎないのである。

然し右に述べた如く、子供はその身心的・精神的なる未發達の故に民族共同體の充全なる構造肢體たり得ざるものである。所が國家の共同體的具體の充全なる構造肢體として共同體的心性を保持する事は、國家の歴史的・人倫的建設にとり不可缺必須の要件である。故に個體の身心及び精神のより高度の成長發達を俟つて充全に民族共同體へと陶冶組入する事が、不斷に且つ新しく試みられねばならないのである。一般に個體を民族共同體へと陶冶組入する陶治の類型を、一般の使用法と幾分相異するけれども、之れを基礎陶冶と呼ぼうと思ふ。されば基礎陶冶は、一般の使用法に於ける如く直ちに初等教育と等置されず、更に中等教育及び高等教育に於いても新しき形態・仕方をして遂行される可きである。而して基礎陶冶は、中等及び高等教育に於いては職業陶冶との聯關に於いて遂行されねばならず、初等教育に於いてはこれとの聯關なしに純粹な形で遂行されるのである。斯の如く基礎陶冶は教育の階程に應じてその内實・形態を變ぜざるを得ぬが故に、一般的に之れが本質を概論する事は困難であるが、國民を國家の根源的基礎

と言ふ可き民族共同體と從つてその成員個人と内面的・根源的に融合せしめて共同體の心性を涵養し、共同體との融即一體の感をその實存性の根源より懐かしめ、その成員個人との人倫的關係の中にその人格性の内面より生かしめる事を、基礎陶冶は本質的目的とすると言ふ事が出来るでもあらうか。斯の如く共同體及びその成員との融即感を涵養陶冶するといふ點に於いて、基礎陶冶は先きに述べた種的共同體の教育と共通なる本性を持つ。勿論後者に於ける如く、人間の知性を迷信呪術の種の閉鎖性の中に閉ぢ込め、その個人性の發達伸長を抑壓阻害して種の集團意識の段階に停滯せしめんとするのではなくして、却つて知性の發達を促進指導し、個的主體性の伸張を幫助強化し、以て知性・個的主體性との媒介に於いて育成陶冶を遂行するといふ點に關しては、重大なる相異を持つ事否定出来ない。然し共同體及びその成員個人との融即感とは、單なる個人性の伸長發揮の方向には求められざるものであつて、却つて非個人的なる共同的心情乃至共同的精神に於いて先づ涵養育成されるものと言はねばならぬ。而して共同體との融即感の主體即客觀の基底は初等教育に於いては前個人的心情であり、この心情は正に我々が考察しつゝある存在論的・人間學的段階に固有な心性なるが故に、比較的純粹なる基礎陶冶たる初等教育につき、我々はこの段階に於いて論述を試みたのである。これに對し共同體との融即感とは、中等及び高等教育に於いては、超個人的共同精神更には超越的絶對を媒介せるものなるが故に、當然對自的個人性の成立する次元以上の段階に於いて考察論述さる可きものと言はねばならぬ。(未完) (二六〇〇・十二・廿九)

【前號正誤】

六二頁ノ十六行目——要求を先足せんと——要求を充、足せんと

七〇頁ノ十五行目——絶對の特殊なる——絶對は、特殊なる

七六頁ノ十六行目——人格的交渉關係——人格的交渉關係、

八六頁ノ一行目——存在者・主體・實在——存在者・主體・實在、

教育的現實(承前)